

芥川龍之介「河童」の構成について

岡田紀恵

芥川龍之介の小説「河童」は、昭和二年三月一日に発行の雑誌『改造』に発表された。

この作品には、執筆当時に、芥川が関心を持っていた様々な問題が詰め込まれている。産児制限、出産、遺伝、家族制度、芸術、恋愛、検閲、資本主義、政治、戦争、法律、自殺、宗教等、実に多岐に渡って取り上げられている。

「河童」執筆後約五ヶ月で芥川が自殺してしまったこともあり、これらの問題が芥川にとってどんな意味を持つのか、ということが主に論じられてきた。

しかし、ここでは主人公となっているS精神病院の患者、第二十三号である△僕▽と、河童という生物についての設定から生じている問題点を論じてみたい。

「河童」は芥川の関心事が河童の世界を借りて描かれているが、作品として構成に多くの問題や矛盾がある。

それを△僕▽、河童、△僕▽と河童の三つに大きく分けて、その設定を中心に置いて述べたいと思う。

一、

「河童」の主人公はどういった人間とされているのだろうか。

「河童」は「序」と十七章で成り立っているが、「序」で主人公は△「筆記」者の僕▽によって三人称でその姿を描かれる。

東京市外××村のS精神病院の患者、第二十三号が「一」〜「十七」における△僕▽である。姓名は書かれていない。△僕▽の半生についても、「——いや、そんなことはどうでも善い。」とされていて分らない。

その容姿は、三十歳を越しているだろうに「一見した所は如何にも若々しい狂人」であるという。

そして「一」から始まる河童の話を語る時の「僕」の様子はこのようにものである。

年よりも若い第二十三號はまづ丁寧に頭を下げ、蒲團のない椅子を指さすであらう。それから憂鬱な微笑を浮かべ、靜かにこの話を繰り返すであらう。

この後に話を終えてからの彼を説明する文章が続くが、話している最中の様子がその少し前に書かれている。

彼は唯ちつと兩膝をかかへ、時々窓の外へ目をやりながら、(鐵格子をはめた窓の外には枯れ葉さへ見えない程の木が一本、雪曇りの空に枝を張つてゐた。)院長のS博士や僕を相手に長々とこの話をしやべりつづけた。尤も身ぶりはしなかつた訣ではない。彼はたとへば「驚いた」と言ふ時には急に顔をのけ反らせたなりした。……

話終えてからの彼の態度は一変する。

最後に、——僕はこの話を終つた時の彼の顔色を覚えてゐる。彼は最後に身を起こすが早いのか、忽ち拳骨をふりまはしながら、誰にでもかう怒鳴りつけるであらう。——「出て行け!この悪黨めが!責様も莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、圖々しい、うぬ惚れきつた、残酷な、蟲の善い動物なんだらう。出て行け!この悪黨めが!」

こういう描写からは、彼が確かに狂っている、ということに分かるが、結局の所客観的にはそれだけしか語られないのである。

「十七」でも「筆記」者の「僕」が()内に顔を出し、第二

十三号の様子を語っているが、これも彼が狂人であることを強調するものなのである。そしてそれは、この後に始まる彼の河童の話が狂人の妄想に過ぎないのである、という大前提の強調にもなっている。言い方を変えれば、それ以上の設定を出来るだけ避けているのである。主人公がどういう人間かよりも、河童という空想上の生き物を使って語る世界の方に重きを置く為、である。

狂人である第二十三号の「僕」は、当然のことながら自身の狂気を自覚していない。だから「僕」の記憶でいえば、河童に出会い、河童の国へ行く↓河童の国で暮らす↓人間社会へ帰る↓事業に失敗する↓河童の国へ帰ろうとする↓巡査につかまり、病院へ入れられる、というのが経過である。

しかし彼が発狂しており、彼の元を訪れる河童達の土産(黒百合の花束やトックの全集)が実際には存在していないことが「筆記」者の「僕」によって明らかにされている以上、河童の国の存在も否定されるのである。河童の話そのものが妄想だということになる。

では「僕」の話は全て妄想なのだろうか。酒井英行氏は次のように述べている。⁽¹⁾

「僕」が「狂人」として設定されているために、「僕」の話のどこまでが事実であるのか、どこからが妄想であるのか、が不明なのである。(中略)

客観的な事実としては、事業に失敗する↓発狂する↓河童にまつわる妄想を抱くようになる、という時間経過であったはずである。

△僕△の話のどこまでが事実なのか分からないのは、△「筆記」者の僕△が事実かどうか明確にしていけないからである。

△「筆記」者の僕△は、河童達の土産が存在していないことは書いてあるが、△僕△が穂高山へ登山したことや、事業の失敗の話が事実であるとは書いていない。人間の世界のことだから事実だろうとも言えない。△僕△が初めて河童に出会ったのは人間の国でのことだし、河童の国から人間の国へ帰ってきてからも△僕△は河童に何度も会っている、と言っているのだ。

酒井氏の述べているような、「事業に失敗する↓発狂する↓河童にまつわる妄想を抱くようになる、という時間経過」が「客観的事実」であるとは決して言えない。そういう可能性もある、というだけである。人間の世界のことさえ、確かに事実である、と言い切れることは、△僕△の話の中には無いのである。

しかし、△僕△にとっては全て事実なのであって、だからこそ河童の話は現実味を帯びてくるのである。

「一」から、第二十三号は△僕△という一人称で語り始める。三年前の夏に、△僕△はリュックサックを背負って上高地の温泉宿から穂高山へ登ろうとした。登山経験がある為、案内者もつれず一人で行ったが、深い朝霧に目を遮られてしまう。疲労と空腹も重なって、△僕△は梓川の谷へ下り、水ぎわの岩に腰かけて食事を始める。いつしか霧が晴れかかり、△僕△は腕時計を覗いて見た。その覗いた円い腕時計の硝子の上に「何か氣味の悪い顔が一つ」、「ちらりと影を落した」のである。

この時が、△僕△が初めて河童を見た時で、その印象は「何か氣味の悪い顔」というものであった。

△僕△の後の岩の上には河童が一匹いて、△僕△を珍しそうに見下ろしていた。その後、△僕△のとった行動は次のようなものである。

僕は呆つ氣にとられたまま、暫くは身動きもせずにゐました。河童もやはり驚いたと見え、目の上の手さへ動かしません。そのうちに僕は飛び立つが早いか、岩の上の河童へ躍りかかりました。同時に又河童も逃げ出しました。いや、恐らくは逃げ出したのでせう。實はひらりと身を反したと思ふと、忽ちどこかへ消えてしまつたのです。僕は愈驚きながら、熊笹の中を見まはしました。すると河童は逃げ腰をしたなり、二三メートル隔つた向うに僕を振り返つて見てゐるのです。それは不思議でも何でもありません。しかし僕に意外だつたのは河童の體の色のことです。岩の上に僕を見てゐた河童は一面に灰色を帯びてゐました。けれども今は體中すつかり變つてゐるのです。僕は「畜牛!」とおほ聲を擧げ、もう一度河童へ飛びかかりました。河童が逃げ出したのは勿論です。それから僕は十分ばかり、熊笹を突きぬけ、岩を飛び越え、遮二無二河童を追ひつづけました。

△僕△は、自分の背後に居たものが「画にある通り」の姿だった為、すぐに河童であると分かった。芥川は「水虎晚婦之図」や「娑婆を逃れる河童」等、河童の絵を多く描いているが、その絵は不氣

味で鬼気迫る、まさに「氣味の悪い」ものである。

河童だと一見して分かったとはいえ、生まれて初めて見た「氣味の悪い」生き物を前にして、普通の人間ならひどく驚き、恐怖心を抱くのではないだろうか。恐怖しないまでも、不用意に手を出すのはためらうものではないだろうか。相手が相手だけに、不測の事態が起きることも十分に考えられるのだから。だが、△僕▽は最初こそ「呆つ氣にとられたまま、暫くは身動きもせず」にゐる。たものの、「そのうちに僕は飛び立つが早い、岩の上の河童へ躍りかか」ったのである。

声をかけてみるとか、ゆっくり近づいてみるとかではないのである。「三」で河童の身長が「一メートルを越えるか越えぬ位」とあるので、子供位の身長の子河童をあたったのだろうか。それにしてもやはり随分無謀な行動であると思う。

その後も、△僕▽は「もう一度河童に飛びかか」っている。そして「三十分ばかり」「遮」「無」河童を追ひつづけ」た。「氣味の悪い」河童の体色が灰色から緑に変わるといふ「意外」なことが起きて、ものである。

芥川は△僕▽を国へ行かせなければならなかった。早く河童の国へ行かせないといつまでたつても河童の話を始められない。そんな思いが随分無茶な△僕▽の行動に表れてしまったのではないだろうか。

河童の後を追うというのは、話の展開上どうしても必要だが、やはり最初位はゆっくり近づき、恐る恐る追いかける方が自然ではな

いだろうか。そして追う内に見慣れてきて、恐怖心を忘れ、熊笹の中へ飛び込んだ河童を見て「――僕も『しめた』と思ひましたから、いきなりそのあとへ追ひすがりました。」とすれば良かったのではないかと思う。

万一、恐怖や氣味悪さを最初の、ほんの一瞬しか感じなかったのでは、と考へたとしても、それも「五」で否定せざるを得ない。

トックは僕の顔を見ると、いつも微笑してかう言ふのです。
（尤も河童の微笑するのは餘り好いものではありません。少くとも僕は最初のうちは寧ろ無氣味に感じたものです。）

「河童の微笑」を見るようになったのは、△僕▽が河童の国に来たからのはずで、当然「最初のうち」というのも河童の国に来た「最初のうち」であろう。微笑という、本来好印象を与える表情さえ無氣味に感じたのである。初めて見た河童に恐怖も感じず、いきなり躍りかかるといふのは、やはり矛盾していると言えよう。

他の疑問点は△僕▽と河童の両方から考えることにしたいのだが、語りの視点の問題をここで述べたい。

「十七」においても、△僕▽の一人称で話が進行するが、次の一文は一人称が崩れてしまっている。

が、我々人間にもいつか次第に慣れ出したと見え、半年ばかりたつうちにどこへも出るやうになりました。

これは第三者、たとえば△僕▽の家族や友人等、△僕▽の周りの人でなければ不自然である。特に文章の前半、「我々人間にもいつか次第に慣れ出したと見え」は、△僕▽という一人称なら「人間に

もいつか次第に慣れ出し」とすべきである。

「十七」では再び「筆記」者の僕が（ ）内に登場し、第三者の視点から「僕」を語る所が数ヶ所ある。これは前に述べたように河童の国が実在しないこと、「僕」が発狂していることを明示する為に必要なのだが、「十七」で「筆記」者の僕を登場させることを意識し過ぎ、余計な所で一人称を崩してしまったのではないだろうか。

二、

この作品に出てくる河童という生き物は、具体的にはどんな姿をしているのか。「三」で「僕」が説明している。

頭に短い毛があり、手足に水掻きがついている。身長は一m前後、体重は二十ポンドから三十ポンド位だが、五十ポンドを越える河童もいるという。頭の真ん中には楕円形の皿があって、その皿は年齢によって固くなっていく。河童の皮膚の色は一定でなく、何でもその周囲の色と同じ色に変わる。（「僕」は皮膚組織の上に何かカメラオンに近い所を持っているのではないかと考えている。）皮下脂肪が厚いのか、河童の国の温度が低目なのにも拘わらず（平均華氏五十度前後）、着物を着ない。皮膚はぬらりと滑らかな手触りである。太い嘴を持ち、腹に袋があり、目金や巻煙草の箱や金入れは袋にしまうことが出来るのである。

芥川が好んで描いた河童の絵を見ると、目がとても大きく、全体

に身体つきが細く、手足は長い。太った河童もいるというが、その絵姿を基準にして良いと思う。

河童の国の文明は人間の国の文明、少なくとも日本の文明と余り大差は無い、という。そして、「河童は我々人間が河童のことを知ってるよりも遙かに人間のことを知ってる」という。その理由は、次のようなものである。

それは我々人間が河童を捕獲することよりもずっと河童が人間を捕獲することが多い為でせう。捕獲と云ふのは當らないまでも、我々人間は僕の前にも度々河童の國へ来てゐるのです。のみならず一生河童の國に住んでゐたものも多かつたのです。なぜと言つて御覽なさい。僕等は唯河童ではない、人間である。云ふ特權の爲に働かずに食つてゐられるのです。現にバツグの話によれば、或若い道路工夫などはやはり偶然この國へ来た後、雌の河童を妻に娶り、死ぬまで住んでゐたと云ふことです。

「人間であると云ふ特權」というのは、「特別保護住民」になれる、ということである。「僕」もこの法律に従い、家を与えられ、働かずに生活出来るようになる。

しかし、多くの人間が河童の國を訪れ、一生を過ごした者も居るというが、この作品中では、河童の國で「僕」が他の人間に会うことは一度も無い。河童は何十匹も登場するが、河童の國で暮らす人間に一人も会わないというのは、少々不自然ではないだろうか。

そして、「僕」に与えられる家も家具も、河童の寸法に合わせてあるもので、人間には使い辛い。人間が多く住み、法律まで出来て

いるのに、人間に与える家が河童用のものというのはおかしい。人間用の家位あつても良さそうなものだ。

また、△僕▽に言わせれば河童の国の文明と日本（人間の国）の文明と大差はないというが、河童はそうは思っていないようだ。

たとえば、△僕▽が学生のラップと、河童の国で行われている遺伝的義勇隊について話した時のことである。ラップは△僕▽にこう言う。

「第一この間あなたの話したあなたがた人間の義勇隊よりも、——一本の鐵道を奪ふ爲に互に殺し合ふ義勇隊ですね、——ああ云ふ義勇隊に比べれば、ずっと僕たちの義勇隊は高尚ではないかと思ひますがね。」

他にも、△僕▽と裁判官のベツプが河童の国の刑法について話した時を例に挙げると、

僕は冷然と構へこんだベツプに多少反感を感じてゐましたから、この機會に皮肉を浴せてやりました。

「この國の死刑は日本よりも文明的に出來てゐるのでせうね?」
「それは勿論文明的です。」

ベツプはやはり落ち着いてゐました。

「この國では絞罪などは用ひません。稀には電氣を用ひることもあります。しかし大抵は電氣も用ひません。唯その犯罪の名を言つて聞かせるだけです。」

「それだけで河童は死ぬのですか?」

「死にますとも。我々河童の神經作用はあなたがたのよりも微

妙ですからね。」

この他にも所々、人間を少し見下した河童の発言が見られる。これは、「彼等の滑稽と云ふ觀念は我々の滑稽と云ふ觀念と全然標準を異にしてゐる」という設定にも関わることだと思ふ。人間の國での常識的な考え方が、河童の國では可笑しがられてしまうのである。△僕▽も、その為にも河童達に笑われている。そもそも、人間を「捕獲」とか「特別保護」するという表現も、河童が人間を弱者と見ていることを示していないだろうか。

だが、矛盾している所も幾つかある。

河童の世界は階級意識がはっきりしていて、年をとつていても漁夫のバッグは若い医師のチャックに対し腰が低い。身分低い職工ともなれば、失職すると職工屠殺法により殺され食肉にされてしまう。「特別保護住民」の△僕▽は身分高く扱われていると言つていい。バッグが△僕▽に対しへりくだるのは勿論、硝子会社社長のゲエルとも全く対等で、ゲエルの属している倶楽部にもよく行つてゐる。また、音楽会のプログラムには独逸語が使われ、哲学者のマッグの本にはポオドレルやヴォルテルといった人間が名を挙げられている。同じ本の中に次のような文章があるにも関わらずである。

我々は人間よりも不幸である。人間は河童ほど進化してゐない。そして、河童の國の最も勢力のある宗教である近代教（生活教）で、聖徒としてその半身像が龕に納められているのは人間ばかりである。少なくとも作品中で河童の聖徒が紹介されることは無い。こうしてみると、河童は人間を一体どう見ているのか判断し難い。近

代教の聖徒を人間にしたのは、芥川が説明し易く、読者にも分かり易いように、と考えたからではないだろうか。著名な人間の名を挙げた方が確かに分かり易い。しかしその為に河童の人間観を混乱させてしまっている。自殺した詩人トックの幽霊に、心靈学協会の会員達は、ナポレオンや孔子等、人間の心靈の消息ばかりを尋ねる。河童達は人間を嘲笑いながら尊敬するという、全く矛盾した生き物になってしまった。

職工屠殺法にも疑問がある。河童の国では「平均一箇月に七八百種の機械が新案され、何でもずんずん人手を待たずに大量生産が行はれ」、「従つて又職工の解雇されるのも四五萬匹を下らない」という。そこで職工屠殺法が適用されるのである。医師のチャック曰く、「つまり餓死したり自殺したりする手数を國家的に省略してやる」のである。そしてその殺された河童達は食肉となり、身分高い河童達の食料となるのである。「文明的」だと言う割には、随分野蛮な習慣に思える。しかし河童達に言わせれば、「職工の肉を食ふことなどに憤慨したりするのは感傷主義」だと言う。神経作用が微妙で、「犯罪の名を言つて聞かせるだけ」で死んでしまう河童のはずなのに、矛盾していないだろうか。

また、職工屠殺法では、職工達を殺すのに「有毒瓦斯を嗅がせる」のだと言うが、食肉になる職工に有毒瓦斯を使用するのはどうだろうか。肉に毒素が残りそうなものだ。何も有毒瓦斯を使わなくても、ただでさえ神経作用の微妙な河童なのだから、他に方法が幾らでもある。何か別の方法にしておけば良かったのではないか。芥川はこ

の法律をより残酷なものにする為に有毒瓦斯を使うとしたのだから、考えが足りなかったのではないかと思う。

三、

「四」で、 \wedge 僕 \vee は医師のチャックと産児制限の話をして、チャックに大笑いされる。チャックに言わせれば、産児制限は、「両親の都合ばかり考へてゐる」「どうも餘り手前勝手」なやり方だと言うのである。

この話を \wedge 僕 \vee は「我々人間は正義とか人道とか云ふことを眞面目に思ふ、しかし、河童はそんなことを聞くと、腹をかかへて笑ひ出す」ということの例として挙げているのだ。

だが本当にそうだろうか。酒井氏は次の様に述べている。⁽²⁾
 「滑稽と云ふ觀念」が「逆」である一例として、産児制限の問題が提示されているのであるが、チャックが「僕」の話を笑うのは、「滑稽と云ふ觀念」が「逆」だからではないのである。チャックは、河童の国とは「逆」の在り方、親の都合だけで産児制限する人間の身勝手さを笑っているに過ぎないのである。
 「すべてを逆にせよ」⁽³⁾という命題の一角は既に崩れているのである。

酒井氏の言う通り、チャックは人間の身勝手さを笑っているのであつて、ただ「滑稽と云ふ觀念」が違うからではない。もし觀念の違いが理由ならば、チャックは『そんなつまらないことを眞面目に

考へるなんて馬鹿馬鹿しいですよ。』とでも言うところだろう。

産児制限の話の代わりに、△僕▽が「我々人間から見れば」可笑しい、とするのは「河童のお産」である。△僕▽は漁夫のバググの細君のお産を見に行ったのだが、それはこんな様子で行われていた。

河童もお産をする時には我々人間と同じことです。やはり医者や産婆などの助けを借りてお産をします。けれどもお産をするとなると、父親は電話でもかけるやうに母親の生殖器に口をつけ、「お前は这个世界へ生れて来るかどうか、よく考へた上で返事をしろ。」と大きな聲で尋ねるのです。バググもやはり膝をつきながら、何度も繰り返してかう言ひました。それからテェブルの上にあつた消毒用の水薬で嗽ひをしました。すると細君の腹の中の子は多少氣兼ねもしてゐると見え、かう小聲に返事をしました。

「僕は生れたくはありません。第一僕のお父さんの遺傳は精神病だけでも大へんです。その上僕は河童的存在を悪いと思ひてゐますから。」

バググはこの返事を聞いた時、てれたやうに頭を掻いてゐました。が、そこにゐ合わせた産婆は忽ち細君の生殖器へ太い硝子の管を突きこみ、何か液體を注射しました。すると細君はほつとしたやうに太い息を洩らしました。同時に又今まで大きかつた腹は水素瓦斯を抜いた風船のやうにへたと縮んでしまひました。

河童のお産というのは、この様なものである。△僕▽は「河童の

お産位、可笑しいものではありません。」と言う。だが、本当に「可笑しい」などと言えるものだろうか。

河童の子供は母親の腹に居る内から自分の意志を持って、考え、話すことも出来る。そればかりでなく、「生れるが早いか、勿論歩いたりしゃべつたりする」し、「出産後二十六日目に神の有無に就いて講演をした子供もあつた」位である。尤もその子供も二月目には死んでしまつたが。

つまり、河童の子供は胎児の内から、自分の人生について考え、生死をも決められるほどに理性を持っているのである。バググの言葉にしても、非常に冷静で、子供の無邪気さは感じられない。精神的には立派に大人である。この点から考えると、「十三」でのトックの子の描写はおかしい。トックの自殺に際し、二才か三歳のその河童は、「何も知らずに笑つている」とあり、△僕▽はその子供の河童をあやしてやった、という。河童の子なら、そんなことは有り得ないはずだ。このトックの子の描写は、河童でなく人間の子どものである。本能のみで生まれてきて、やっと物心がつくつかないか、生死の概念もまだ分かりはしない人間の幼児の場合にのみ成立するものなのである。

トックの幽霊が、自分の死後、我が子の身を案じたことも合わせ、残される子供の不憫さを描きたかつたのだろうが、やはり無理がある。

お産の問題に戻るが、河童の子供は生まれることを自らの意志で選ぶことが出来る。生まれることを拒否することは、死を望むこと

と同じではないのだろうか。人間の子供は誕生を拒否することは出来ない。その時はまだ本能しか持ち合わせていないからだ。誕生すべきかどうか、自分で決められるような理性など無い。

だが河童は違う。誕生時の選択は、それがまだ胎内にいる内に行われる為に、一見そうはみえないが、拒否＝自殺ではないだろうか。そう考えるならば、産婆のとする行動は自殺幫助とも言える。それにも拘わらず子供の河童にバッグは「てれたやうに頭を掻いて」いるだけで、悲しむ様子も無い。この場面自体において、当の子供以外誰一人悲し気ではないのだ。

これらの点について、塚越和夫氏は次のように述べている。⁽⁴⁾

われわれがおのれの意志によってこの世界に生存しはじめたのではないという、人間存在の不合理な無目的性を、きわめて機智に富んだ解決法によって解消したかに見えるこの場面は、

——おそろく、芥川は、こんな場面の設定によって、「聊か鬱懷を消した」⁽⁵⁾のかもしれないのだが、にもかかわらず——その底に、陰惨な翳を漂わせている。これは、要するに「墮胎」なのだ。そこには、「中絶」などという気取った合法的な表現に見られない非合法的な、暗い、やりきれないイメージが存在している。「産児制限」すら弾圧された当時の状況下で、それは不当な刑法に対するレジスタンスであると受け取れないこともない。しかし、出産前にまで成長し、父親と会話までできる河童の胎児は、的確な判断力を身につけており、立派に人格を備えているといつてよかろう。その胎児を注射一本で抹殺してし

まうことは、これはもう殺人である。軽く見積っても自殺幫助だろう。この犯罪を芥川が河童国の出来事として「可笑しいもの」ととらえ、軽快に記述しているところに、恐しい精神の荒廃を見ないわけにはいかない。

塚越氏は、大正十一年三月一日、改造社の招きによって来日した産児制限連盟のサンガー夫人が、日本に当時与えた影響を考え、「河童」にも「この問題が念頭にあつたことは「まず疑いのないところである。」⁽⁶⁾と述べている。

「僕」が「我々人間から見れば」と前置きする以上、その判断は人間の基準で言えば非常に一般的、常識的でなければならぬはずである。しかしここで「僕」は、塚越氏も述べているように「恐しい精神の荒廃」を見せた芥川自身を反映しており、決して一般的な人間ではないのである。

河童のチャックは、産児制限を笑う理由を述べている。しかし「僕」は何故可笑しいのか明らかにしていない。可笑しくて当然のことだ、ということだろうか。子供への冷酷さばかりが感じられる。自ら誕生するか否か選べるのだから、幸せなのではないか、という考えで芥川はこんな設定を考えついたのだろう。しかし、本当にそうだろうか。

作品中に登場してくる河童達は多いが、彼等は皆望んで生まれてきたはずなのである。彼等も、誕生前に父親にその意志を尋ねられて、生まれることを望み、そう答えたはずなのだ。そうでなければそもそも彼等はこの世に居ないのだから。そして望んで生まれたな

ら、生きていくことに苦しんではならないはずなのだ。しかし実際に追いつめられ、自殺してしまう河童が居るのである。生を選んでも発狂したり自殺したりしてしまうなら、その最初の選択の意味はあるのだろうか。最初に選択出来たからといって幸せだとは言えないのではないのか。選択そのものが無意味になり得るのである。トックの自殺は、誕生の選択が可能だったとしても意味の無いものだ、示してしまっているのである。

バッグの子供は遺伝の精神病を恐れ、誕生を拒否する。河童の国では「遺傳的義勇隊」が募られ、悪遺伝撲滅運動が行われている。

遺傳的義勇隊を募る!!!

健全なる男女の河童よ!!

悪遺傳を撲滅する爲に

不健全なる男女の河童と結婚せよ!!!

これが募集ポスターに書かれた文章である。〈僕〉と一緒に居たラップという学生に、そんなことは行われないと話した。だがラップばかりでなく周りの河童にことごとく笑われる。ラップは同じことを人間達だっ行ってと言おう。たとえば「令息が女中に惚れたり、令嬢が運轉手に惚れたりする」ことは無意識の悪遺伝撲滅なのだと言おうのである。

これに対する〈僕〉の反応ははっきり書かれていない。この時丁度〈僕〉は或河童に万年筆を盗まれてしまい、それどころでなかったのである。

河童のお産の話と遺傳的義勇隊の話は、芥川が精神病の実母を持ち、その遺伝を特に晩年に恐れていたことと深い関連があると、多くの人が語っている。確かにこの関連性は重要だが、悪遺伝というものをもう少し広範囲に考えることも出来るだろう。

遺伝というのは、祖先や親の体質や性質が子孫に伝わることを言うものである。精神的なものと肉体的なものの両方を言うのであって、どちらかに限ったことではない。

ラップが言った「令息が女中に惚れたり、令嬢が運轉手に惚れたりする」というのは、令息や令嬢の高貴な血によって女中や運轉手の下賤な血が清められ、悪遺伝の撲滅となっている、ということなのだろう。この場合、少なからず容姿（美しさ、上品さ）も関わってくるはずである。

ここで河童の恋愛について少し見ておきたいのだが、河童の恋愛はとにかく雄が雌に追いかける、という変わったものである。雌の河童に追いかけられた雄の河童は、たとえ逃げ切れても、その後二三箇月は床に就いてしまし、ラップに至っては嘴がすっかり腐ってしまったほどなのである。〈僕〉も「雄の河童こそ見じめです。」と言うほどの凄じさである。妻子のいるバッグでさえ追いかけることがあるというのだが、哲学者のバッグだけは一度もつかまなかったことが無いのである。

〈僕〉はバッグが一度もつかまなかったことの無い理由を二つ挙げている。「一つにはマッグ位、醜い河童も少ない爲」「又一つにはマッグだけは餘り往來へ顔を出さずに家にばかりゐる爲」である。

圧倒的に雌の河童の立場が強い河童の恋愛において、遺伝的義勇隊がどの様に活躍するのか、疑問が無いわけではない。本来健康な雄河童が雌河童に追われて寝込んでしまったのでは、遺伝の問題どころではないだろう。

しかし敢えてそういった点は置いておいても、マッグが一度もつかまえられたことが無い、というのはどうだろう。マッグの稀に見る醜さは、十分悪遺伝なのではないか。ラップ達と言うには河童の国では意識的に悪遺伝の撲滅が行われているはずである。マッグなど当然その対象になり得るのではないか。余りマッグが外出しないとは言っても、音楽会へ出かけたりはしているのである。それに決して人嫌いでもなく、むしろ客好きなのである。精神病の遺伝はその人が本当に発狂するまで分からないだろうが、肉体的なことは一目で分かるのに、マッグは何故つかまえられないのか。これも矛盾の一つであろう。

また、恋愛と結婚の間にも大きな矛盾がある。河童の恋愛はこれまで述べた様に、雄の河童にとっては本当に恐ろしいものである。だが結婚後は全く違った関係になっているのである。

△僕▽が詩人のトックと、トックが属している超人倶楽部から帰る途中のことである。トックは小さな窓の向こうに見えた「夫婦らしい雌雄の河童が二匹、三匹の子供の河童と一しよに晚餐のテーブルに向つてゐる」のを見て、△僕▽に『ああ云ふ家庭の容子を見ると、やはり羨しさを感じるんだよ。』と言うのである。この家族を△僕▽は「平和な五匹の河童たち」とも言っている。またゲェルの

家庭の様子を、△僕▽は「荔枝に似た細君や胡瓜に似た子供を左右にしながら、安樂椅子に坐つてゐる所は殆ど幸福そのものです。」と語る。

これらの描写からは、河童の恋愛の凄じさはまるで感じられない。平穩で暖かな家族生活がそこにある。

家族制度を「莫迦げてゐる以上に莫迦げてゐる」と信じ、「超人的戀愛家」を自称するトックが、家族の団欒を見て「羨しい」と言うのを聞き、△僕▽は『しかしそれはどう考へても、矛盾してゐるとは思はないかね?』と問う。トックは『あすこにある玉子焼は何と言つても、戀愛などよりも衛生的だからね。』と答える。

塚越氏は次の様に述べている。

『河童』の中には、恋愛と結婚とはっきり區別する記述は何もない。恋愛の状態で雌の河童に抱きつかれた雄は、くちばしが腐つたり、寝込んだりするけれども、結婚生活においては、抱きつかれようとどうしようと雄の河童は無事平穩に生殖行為を営めるとでもいうことなのか? 何とも理解に苦しむところなのだ。退屈でうんざりすることかもしれないが、とにかく「衛生的」な家庭生活と、死に至る病である恋愛との間に存在する矛盾を、少くとも生理的に解決するだけの記述が存在しなければ、素朴な読者には納得できないところである。

河童の家族は、「退屈でうんざりする」と言うよりも、「犠牲的精神」が必要な場であり、その点をトックは軽蔑しているのであるし、河童の恋愛を「死に至る病」と言うのは言い過ぎだと思ふ。だがや

はり恋愛と結婚の間には矛盾があり、それに関する説明はされてない。矛盾がそのまま放り出されているのである。〈僕〉は恋愛については雄の河童を哀れに思い、家族についても、犠牲になっている河童を見て感心したり同情したりはするが、その矛盾に気付かないままである。

そして、この作品では河童のトックと人間の〈僕〉が発狂してしまふことになっているが、もう一匹、河童が発狂したと最後に〈僕〉は語っている。裁判官だったベップである。

——ああ、このことは忘れてゐました。あなたは僕の友だちだった裁判官のベップを覚えてゐるでせう。あの河童は職を失つた後、ほんたうに發狂してしまひました。何でも今は河童の國の精神病院にゐると云ふことです。僕はS博士さへ承知してくれば、見舞ひに行つてやりたいのですがね……。

「ほんたうに」という言葉は、以前に發狂の前兆がベップにあつた場合にのみ言うべき言葉である。だがベップにそんな前兆があつたかどうか。

ベップは「八」で初めて登場する。裁判官で、医者、チャックと共に〈僕〉を連れてゲエル家の晚餐へ時々出かけたという。ベップが登場するのは「八」「十二」「十三」であるが、「八」「十二」は〈僕〉が河童の國の法律について知りたい時で、「十二」では正に「そこに裁判官のベップが来てゐたのは何よりも僕には好都合です。」という〈僕〉の言葉がある。「十三」は「十二」から話が續く為登場しているが、基本的に河童の國の法律の説明が必要な場面にベッ

プが登場すると考えて良いだろう。

「八」でのベップはほとんど話さない。「八」は河童の國の「工業上の奇蹟」の為に、大量に解雇される職工がどうなるのか〈僕〉が疑問を持つ場面である。その答えはゲエルやチャックがほとんど話してしまい、ベップは『それは騒いでも仕かたはありません。職工屠殺法があるのですから。』と「山桃の鉢植を後に苦い顔をして」言うだけである。そして職工の肉のサンドウィッチをゲエルに勧められて辟易し飛び出してしまった〈僕〉を、チャック達と一緒に笑い飛ばすのである。

「十二」では〈僕〉が「刑法千二百八十五條」についてベップに尋ねる。これは『如何なる犯罪を行ひたりと雖も、該犯罪を行はしめたる事情の消失したる後は該犯罪者を處罰することを得ず』というもので、話は死刑にまで及ぶ。その間のベップの様子については、この様なものである。

ベップは金口の煙草の煙をまづ悠々と吹き上げてから、如何にもつまらなさうに返事をしました。(略)

ベップは巻煙草を抛り出しながら、氣のない薄笑ひを洩らしてゐました。(略)

僕は冷然と構へこんだベップに多少反感を感じてゐましたから、この機會に皮肉を浴せてやりました。(略)

ベップはやはり落ちてゐました。

これらの描写からベップについて分かることは、無表情で親しみにくい、「多少反感を感じて」しまふような河童である、というこ

とだ。狂気を暗示させる所は無い。

「十三」はトツクの自殺に遭遇し、△僕▽や河童達が様々な反応を示すのだが、ここでもベップは冷静である。

しかしベップは何も言はずに金口の巻煙草に火をつけてるました。(略)

「しかしかう云ふ我儘の河童と一しょになつた家族は氣の毒ですね。」

「何しろあとのこと考へないのですから。」

裁判官のベップは不相變、新しい巻煙草に火をつけながら、資本家のゲエルに返事をしてゐました。(略)

「こら、こら、さう覗いてはいかん。」

裁判官のベップは逡巡の代りに大勢の河童を押し出した後、

トツクの家の戸をしめてしまひました。

これ以降、「十七」で△僕▽がベップの発狂について語るだけで、ベップは直接登場しない。名前すら出て来ることは無い。ベップについて書かれていることはこれだけなのである。「十三」での描写も「十二」と大差は無いし、発狂の前兆を感じさせるものはやはり無いと言つていいだろう。

ベップでなくとも、他の河童で発狂の可能性が高い者が数名居る。(トツクは除く。)

最も発狂の兆候があったと言えるのは、学生のラップだろう。雌の河童に抱きつかれてしまい、△僕▽の家に逃げ込んだが、何週間か寝こんだ上に嘴がすっかり腐り落ちてしまうのである。またラッ

プは家族にも恵まれていない。両親と叔母、妹と弟が居るが、父親は酒乱で、弟は手癖が悪い。妹や母、叔母とは些細なことで大喧嘩になつてしまふ。だがラップ自身『僕はトツクさんのやうに大胆に家族を捨てる事が出来ませんから。』と言つてるように、その悩みから逃れることも出来ないでいる。△僕▽とクラブバックを訪ねた帰り、ラップは△僕▽を驚かせる。

學生のラップはいつの間にか往來のまん中に脚をひろげ、しつかりない自動車や人通りを股目金に覗いてゐるのです。僕はこの河童も發狂したかと思ひ、驚いてラップを引き起こしました。「常談ぢやない。何をしてゐる?」

しかしラップは目をこすりながら、意外にも落ち着いて返事をしました。

「いえ、餘り憂鬱ですから、逆まに世の中を眺めて見たのです。けれどもやはり同じことですね。」

「この河童も」というのは、帰る途中に偶然会つたトツクの様子がおかしかったことから來ている。トツクは冷や汗を流しながら、「緑いろの猿」が見えたなどと言つたりしたのである。これは後のトツクの自殺の伏線となつてゐる。

家族のことで悩み、泣き出したラップを△僕▽はクラブバックの所へ連れ出したのだが、クラブバックはヒステリーを起こしているし、偶然会つたトツクも様子がおかしく、ラップはますます「憂鬱」になつてしまつたのである。

そしてトツクの死後、ラップは△僕▽を近代教の大寺院に案内す

る。長老に会って話すが、大寺院へ滅多に來ない弁解をしたり、聖書を『殆ど讀んだことはない』と言ったり、ラップは信仰が篤いとは言いがたいようだ。長老の『トックさんは不幸にも信仰をお持ちにならなかつたのです。』という言葉に、ラップは『僕も嘴さへちやんとしてゐれば或いは樂天的だつたかも知れません。』と言う。

これらの事から判断して、ラップは発狂にこそ至らないが、ひどく悲觀的で憂鬱になっており、その可能性は十分あるだろう。

他の河童も、精神病の遺伝があるという漁夫のバググ、ライバルのロックという音楽家の影響を恐れてヒステリックになっているクラバック等、ペップに比べれば余程発狂の可能性はあるはずである。

十分発狂の可能性を持つ河童達が他に居ながら、何故その可能性がまず無いと言っているペップが「ほんたうに發狂してしまひました。」と「僕」に言われることになったのか。この作品がほとんど「僕」の一人称で語られる以上、ペップの発狂の前兆は「僕」が語らなければならぬ。しかしその様な前兆が何一つ語られていない以上、ペップの発狂は矛盾ではないかと考えざるを得ないのである。

四、

「河童」は、芥川自身「河童は近年にない速力で書いた。」⁽⁸⁾と言っているように、かなり勢いに任せて書かれていた作品だと思ふ。また当時芥川は「河童」だけを書いていたわけではなかつた。

僕は多忙中ムヤミに書いてゐる。婦人公論十二枚⁽⁹⁾ 改造六十

枚⁽¹⁰⁾、文芸春秋三枚⁽¹¹⁾、演劇新潮五枚⁽¹²⁾、我ながら窮すれば通ずと思つてゐる。⁽¹³⁾

放火の嫌疑をかけられて自殺し、借金を残した義兄の後始末に芥川は奔走していた。その忙しさにも関わらず、彼は書かずにいられなかつた。この様な書簡もある。⁽¹⁴⁾

河童百六枚脱稿。聊か鬱懷を消した。(略) 火災保険、生命保険、親族會議、

——何や彼やゴチャ／＼で弱つてゐる。が、それだけに何か書いてゐるのは愉快だ。

嫌な事で忙しかつたからこそ、余計に芥川は書かずにいられなかつたのである。その思いが「近年にない速力」を生んだのだろうが、そうして生まれた「河童」はどんな作品だったか。

関心を持っていた様々な問題を、「すべてを逆にせよ」という命題で書き始めたものの、その命題は成立していない。「逆」と言うよりも、むしろ河童の世界と人間の世界は似かよっている所が多い。人間を誇張し、皮肉つたものが河童の姿になっている部分もある。

「逆にせよ」という命題は結局「ちよつとした思ひつき」⁽¹⁵⁾に過ぎず、中途半端な取り入れ方で終わってしまった。河童と人間の比較や描写が場面ごとに、その時の都合次第で変わってしまった為、一貫性が無く粗の多い作品になってしまったのである。

関口安義氏が「徹底した自虐と嫌悪がうかがえる」「諷刺的意図の盛り込まれた小説である」と言っているように、「河童」には芥川が書かずにいられなかつた心情の告白がある。しかしその勢い

は多くの構成上の矛盾を生み、そのまま終わってしまった。そこにまた改めて芥川の当時の不安定な精神状態を感じずにはいられないのである。

注

- 1 酒井英行「河童」の構造」
（芥川龍之介 テキスト ヲレジンズ 作品の迷路」有精堂 平5・7・10）
- 2 〓注1〓に同じ
- 3 「手帳」5
- 4 塚越和夫「河童」〔批評と研究 芥川龍之介〕 芳賀書店 昭47・11・15）
- 5 昭2・2・16 佐佐木茂索宛
〓注4〓に同じ
- 6 〓注4〓に同じ
- 7 〓注4〓に同じ
- 8 昭2・2・27 滝井孝作宛
- 9 「蜃氣樓」〔婦人公論〕三月号）
「河童」〔改造〕三月号）
- 10 「河童」〔改造〕三月号）
- 11 「輕井澤で」〔文芸春秋〕三月号）
- 12 「芝居漫談」〔演劇新潮〕三月号）
昭2・2・7 蒲原春夫宛
- 13 〓注5〓に同じ
- 14 〓注5〓に同じ
- 15 〓注1〓に同じ
- 16 関口安義「河童」〔芥川龍之介研究〕 明治書院 昭56・3・

5)

本文の引用については、「芥川龍之介全集全10巻」〔岩波書店〕を定本とした。時間的に余裕が無かったので、若干の誤植や、旧字体であるべき文字が新字体のままの所があるかも知れない。